



TITLE:

# コールの大労働組合論

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

---

CITATION:

河田, 嗣郎. コールの大労働組合論. 経済論叢 1919, 9(5): 648-669

ISSUE DATE:

1919-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127593>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第九卷 第五號

大正八年十一月一日發行

## 論 說

特別課徴の課額の決定……………

法學博士 神戸 正雄

社會の羈絆力(一)……………

法學博士 財部 靜治

コールの大勞働組合論……………

法學博士 河田 嗣郎

鷹山公とフリードリヒ大王の農政(二)……………

法學博士 高岡 熊雄

明治の米價調節(三)……………

法學士 本庄榮治郎

## 時事問題

勞働時間問題……………

法學博士 戸田 海市

租稅收入の豫算見積を論ず……………

法學博士 小川郷太郎

## 雜 錄

同盟怠業の道德的批判に就て……………

法學博士 河上 肇

サボタージユ是非……………

法學博士 河田 嗣郎

サボタージユに對する私見……………

法學博士 神戸 正雄

近世の日本(新著紹介)……………

法學士 本庄榮治郎

## コールの大労働組合論

河 田 嗣 郎

### 一 序 言

本誌第九卷第一號に於て吾人はペンチー氏の組合社會主義論の概要を述べ、第一號に於てはカーペンター氏の社會改革意見を評論して置いた。尙ほ今少し詳かに組合社會主義の本質を明かにせむが爲めに、茲に又、コール氏 (G. D. H. Cole) の大労働組合主義 Greater Unionism の見地を窺つて見たいと思ふ。コール氏は人も知る如く、國家的組合社會主義 National Guilds を奉ずる人で盛に New Age 其他の雜誌に論文を掲げて主義の宣傳を爲し、其の著書は近頃我國にも多數に輸入されて廣く讀まれて居る次第である。而して氏は、將來國家的なる組合社會主義制を建立せむが爲めに、英國其他に於ける現存の労働組合を擴張充實し、英國流の職業的區別に依る職工組合主義は之を改造して、漸次に産業的労働組合主義 Industrial Unionism とせなければならぬと主張するのである。之れ即ち大組合主義グレートユニオンイズムの主張である。

### 二 労働組合の間に於ける新しき思想と要求

コール氏は現存の英國式の職工組合が終に克く社會改造の大任務を果さんとする社會主義の要求を充すに足らざるものたるを思ふと同時に、近時一般の事情の變化は、先づ勞働組合其者の改造を必要とするに至り、然かも其の改造は、將來勞働組合が國家と共に之と相携へて産業上の管理を爲す大任務に堪え得るものたらむが爲めに行はれつゝあり、又行はれざるべからざるを信ずるのである。其の大體の見地をば氏は次のやうに論明して居る。

從來の職工組合は勞働者が其の雇傭上に於ける條件を維持し又は改善せむが爲めにする永久の團體たるに過ぎずして、其の目的とし任務とする所は、たゞ經濟の現組織の下に於て、如何にして勞働者の物質的生存條件を改善すべきかに存し、其の雇傭契約を爲すに當りて、所謂集合的取引バイインに依りて成るべく有利なる契約を爲すことに存した。即ち舊式カールドユニオンの職工組合は勞働を商品として、其の價格を維持するを以て主たる目的と爲したのである。従て在來の職工組合は只管眼前の事件にのみ没頭し、賃金の引上、勞働時間の短縮、其他一般的に勞働條件の改善に對して、鬭争を之れ事とするのみであつて遠き將來に對して計畫し、其の理想を建設する餘裕を持つて居らぬ。恰も各個の勞働者が其日々々の生活と眼前の事情に窮迫されて、將來の謀を爲す考を持て居らぬと相似たる狀況に在つて、將來に於ける産業の管理といふが如き學究的開問題には、興味を有せずといふ有様である。されば在來の職工組合よりして社會主義やサンデカリズムに關する一般的

自覺を得んとするは、無理なる註文である。古き職工組合は必竟社會改良論者の立場を守るに過ぎなかつたのである。

然るにも拘らず職工組合は自らは殆んど之を自覺することなくして、自然的に其有する理論が當然導く所に向つて進み行かなければならぬやうになつて來た。即ち彼等は自らは依然として闘争團體たり同時に共助團體たりと考へて居乍ら、實際には勞働時間や勞賃とは直接には殆んど關係なき事柄に向つて進み行かなければならぬやうになつて來た。嘗に勞働雇傭條件を改善するに止らずして、産業全體の組織を變更し、工場に於ける貴族制に代ふるに民主制を以てせむとする企が、今や其の端緒を開かんとして來たのである。<sup>1)</sup>

斯く考へたるコール氏は、勞働組合の間に於ける此の變化の跡をやゝ具象的に説明せんと企て、即ち下の様に述べて居る。

一八八九年のドツク罷業は新思想の曙光の初めて表はれたる一時機を劃するもので、勞働者間に階級的自覺の表はれ來りたる曉鐘と見ることが出来る。此の以後に於ては勞働組合主義はたゞ單に熟練職工の團結せる利己主義たるに止らざることゝなつて來た。不熟練勞働者も亦産業上の自由に向つて戦はんが爲めに之に参加することゝなつた。此の新思想は現今尙ほ未だ十分成熟したものであるが、然し、從來の職業的自覺が階級的自覺に變ずるは、今やたゞ時期の問題たる

1) G. D. H. Cole, The World of Labour, pp. 370 ff.  
dito, Self-Government in Industry, pp. 100 ff.

に過ぎぬことゝなつた。

此の新思想の發顯は從來の社會主義に取つても亦大いなる時機であつた。爾來政治的社會主義は、勞働組合をば政治上に於ける將來の主人として承認し、産業上の自治制を容認することに依りてのみ甫めて完全なる理論たるを得るに過ぎざるものとなつた。然るにも抱らず、社會主義者が之を承認するを怠りしことは、實に彼等の運動をして四半世紀ばかり遅延せしめたのである。

けれども事情は終に社會主義者と職工組合の指導者中よりして、勞働黨レイボラトリーの組織を見るに至らしめた。然るに又此の勞働黨はたゞ政治的方面にのみ没頭して居る間に、組合員それ自身の間には從來社會主義の了解するを得なかつた新しき理想主義が漸次勢力を得るに至つた。即ち半ばは無自覺的に工場に於ける專制主義に對して反抗の試みらるゝに至り、勞働者は勞働者自ら産業を支配し、管理するを得るに至るにあらずんば、其の從屬的境遇は永久に存續すべきを自覺するに至つた。よし國家に依りて産業の經營が行はるゝことゝなり、分配はやゝ公平に行はるゝ状態を迎ふるとも、産業上の自由に對する勞働者の要求は依然として容れらるゝことなかるべきを思はしむるに至つた。かくてサンデカリズムは少しづゝ地歩を占むることゝなり。産業上の不安は勞賃の引上に對する要求たるが如き單純なるものたるに止らず、實に專制に對する反抗と産業上の自治制に對する憧憬とが、其の根柢に横はることが認めらるゝに至つた。<sup>2)</sup>

2) Self-Government, pp. 101-104.

労働組合の間に於ける此の覺醒の最も著明なる表象は、労働者が組合に加入するを強制的ならしめんとする要求の漸次高まり來れることである。現今既に石炭業、鐵道業及びランカシャイヤーの纖維工業に於ては、又運搬業に於てすらも、組合に加入せざる労働者の數は、殆んど云ふに足らざる少數となつて來、雇主側に於ては漸次に労働者各個人との雇傭契約を止めて労働者團體と之を結ばざるべからざる必要生じ、其爲めに雇主は自らも亦大いなる團結を爲さざる可らざるに至つた。

コール氏は此の變化の意義の重大なることに就て左の如くに述べて居る。

つい近頃に至るまでは最も進歩せる企業家も、労働組合に對して反感を有し、雇傭契約に關しては雇主と労働者との間に於ける個別的なる自由契約を以て最も合理的なるものと考へて居た。されば労働組合主義を認むる者も事情止むを得ざるが故に之を認むるといふに過ぎなかつた。然るに最近に至つては、労働組合主義は雇主側に於ても一般的に承認せらるゝ所となり、積極的に其の組織が必要とせらるゝに至つた。而して労働組合主義が一般的に承認せらるゝに至れば、之に加入せざる者あることは、一種の障礙たり威脅たることとなり、集合契約が労働條件を改善し其の一般標準を高むるに有效なるものたる限りは之をして強制的ならしめざるべからずとせらるるに至るを免れ難い。茲に於てか強制的労働組合主義は有識者の間には少くとも理論的に歓迎す

べきものとせらるゝに至つた。

然し斯かる状態が労働者自身の努力に依りて實現せらるゝ迄には、尙ほ時日を要するであらう。それは先づ少數なる組織の完備せる組合に於て行はれて、漸次他に及ぼすの外はないであらう。即ち先づ鑛山鐵道及び纖維工業に於て労働者は悉く組合に加入するに至り漸次及ぼして労働組合主義は何れの方面の工業に於ても之に屬する總ての賃傭労働者を包括することゝなるであらう。

右の如き事情の開展を齎さんが爲めに立法の直接なる援助を喚起せんとするは、必要なこととすると同時に又危険なことである。時機の熟するに至ればそれは自らに表はれ來るべき筈である。

若し將來に於て労働組合が國家と共同して産業管理の事業に當らんとすれば、労働組合は國家と對等の地位に立つに足るだけ有力なものでなくてはならぬ。然るに今國家の手に依りて造らるゝ團體は、國家が自己に都合よきやうに如何様にも捏造し得べき筈である。されば強制的なる労働組合を實現せしむべき唯一の道は、労働者自身の組織されたる實力でなくてはならぬ。されば現今の労働界に於ける最大の急務は、更に多くの労働組合員を得ることである。若し労働組合にして産業の管理に對して何等かの重要な任務を負はんとすれば、組合は單に労働者の一部分の者の團體たるに止らず、労働者全體の團體にならなくてはならぬ。然し此の目的はやはり部分々々に於ける労働者團結の運動に依つて齎らさるゝ外はなく、或産業毎に於ける總ての労働者を組合



に加入せしむることに依りて、結局、全産業に於ける全労働者を團結せしむるを得るのである。従て或産業々々に於ては組合労働者は組合外労働者と共に労働に従事することを拒絶するを以て、其の任務とせなければならぬ。蓋し組合外労働者は常に組合をして火中の栗を拾はしめ、自らは坐乍らにして其の利益に浴すると同時に、彼等の存在は又常に労働者の間に於ける共同一致の運動を妨害するからである。

労働者を多數に組合に加入せしむることは、組合の組織をして更に一層完備せるものたらしむることを必要とする。組合外の労働者に對するキャンペーンを有効に行はんが爲めには、大労働組合主義は必要缺ぐ可らざる所である。労働組合は産業に於ける労働者の全部を包含し、然かも之を出來得る限り少數なる組合に包含せなければならぬ。洵に現在に在りては産業的労働組合主義は完全なるを得難いことは之を認めねばならぬのであつて、労働者の間に於ける種類別を打破して、彼等をして總べて産業的基礎の上に立たしむることは不可能であるけれども、若し將來に於て労働者の組合が産業管理の重要任務に當るべきものとするならば、インダストリアル、ユニオンイズムは正當なる政策である。組合主義者は之を以て理想とせなければならぬ。吾等にして大産業に於ける總ての労働者を包括する労働組合運動を有し、然かもそれは強大なる中央の指導の下に立つものたるに於ては、其の組織を一般的に變更することは可能とならざるを得ない。而して

又勞働組合が雇主の強力なる階級に對して一の鬭争的團體として存續する限りに於ても、勞働組合が産業的基礎の上に立つことは、最も都合よきものたらざるを得ない。

斯くて職工組合の前に横はる次の問題は其の組織の大變更といふ問題であつて、之は組合相互間の大規模なる併合と、熟練勞働者の組合を不熟練者に對して開放することに依つて行はれなくてはならぬ。然し之は中々容易な事業ではない。各種の産業に於ける勞働組合を融合せしめて、一般的産業基礎の上に置かんが爲めには、現存の大組合間に、大いなる利害衝突が表はれ来るを免れ難いであらう。

併しそれは兎もあれ、産業の管理が多少ともに勞働組合化サレザガライズさるべきものなりとせば、將來實現せらるべき強制的組合制を得んが爲めには、現在の分立せる職工組合ワーカーズ・ユニオンよりも産業的勞働組合インダストリアル・ユニオンの方が、遙かによき地位に立つ筈である。それと同時に大勞働組合主義の夢みつゝある強制的組合はやはり之れギルドではないのである。そはやはり、從屬的な又大多數は筋肉勞働を爲す雇傭勞働者の團體であつて、依然として雇主に對立し、獨立生産者と從屬勞働者との團結たる彼のギルドとなることは出来ぬ。而して國家が雇主となる場合に於ても、事情は多く變化することなく、私の資本家に雇はれたると、國家に雇はれたることを問はず、勞働組合は一步步産業管理に向つて地歩を固めて行かなくてはならぬ<sup>3)</sup>。

3) The World of Labour, pp. 371-378.

### 三 將來に於ける産業管理の問題

右の如くにして近時労働者の間には、産業の管理權に對する要求の表はれ來り、之が準備として労働組合改造の問題が實際上の意義を有するまでに立至つたのであるが、然らばさて一般的に將來に於ける産業管理の問題は、之を如何にしたらよいであらうか。管理は國家の手に依りて行はるべきこと集産主義者コレクティヴィストの主張の如くしたらよいか、それとも、之を労働者團體の手に委ねサンデカリズムの主張を實現せしむべきであるか。

或者は以爲らく國家はたゞ資本主義の別名たるに過ぎぬものなれば將來労働者が權力を握るに至れば國家組織と其の機能とは自ら亡び行くべきものであると。——之は一種のアナルキズムの見解である。然るに他者は以爲らく、職工組合は一の取引團體たるに過ぎぬから資本主義の滅亡と共に其の目的を達して無用のものとなつて消滅すべきものであると。——之は單純なる國家社會主義者の見地である。然し乍ら此の見解は兩者共に誤つて居る。一方は國家を以て常に現在あるが如き儘のものとのみ考へて居るし、他方は現時の資本主義制の下に於ける職工組合の任務を以て其の任務の全部と考へて居る。然し將來に完備せる組織を造り出さんが爲めには、此の兩者は共に大いに改造せられ、新精神を以て滿されざるべからざるものなることを忘れてはならぬ。之

に就いてコール氏の考ふる所は次のやうである。

一の確乎たる社會生活は、生産者と消費者と双方の各部分の、權利と人格とを同様に認むることに依りて、國家と労働者の組合とが、新たな任務を執り、各自の權限内に於て管理の任に當る組織に依りてのみ、造り上げらるべきものである。強大なる労働組合に依りて輔けられざる集産主義コレクティヴィズムは、單に大規模なる國家的官僚組織たるに過ぎぬし、又強大なる民主的國家に依りて輔けられざる労働組合は、專制國家同様に、頗る專制的のものたらざるを得ないであらう。

元來産業上の組織の有する當然の權限は、生産の管理と、交易の生産者側の管理とに存するので、其の權能はたゞ直接に生産者の生産者としての利害に關する事柄にのみ限られ、所謂『政治上』の事柄に對しては、何等の容喙權を有たぬ筈である。之に反して産業に關して國家の有する權限は、人々が消費者として有する共通の希望及び必要に關する所を以て限度とし、生産者の利害と、生産に對する管理に就きては、何等の關係を有たぬ筈である。廣義に之を解して産業なるものは、生産と使用との兩方面より成立てるものである。生産は消費の爲めに行はれ、生産物を如何に消費すべきかは、全く消費者自身の事柄である。然るに其の生産の爲めにせらるゝ労働が如何なる條件の下に於て行はるべきかは、全く之れ生産者自身の問題であつて、生産者は門外者に依りて其の管理の行はるゝを堪え得るものでない。然るに古き集産主義者は、將來産業は國家

又は地方自治體の手に依りて行はるべく、其の場合には勞働者は此等の手に雇はるべきものであるが、賃金其他に至つては社會一般が消費者として有する好意に依りて、現在よりも遙かに勞働者に有利に定めらるべきものなりとする。然るに又之に反して、彼のサンデカリストの要求する所は、勞働者の團體は産業上に於ける一切の權能を掌握せざるべからずと爲し、直接行動に依りて資本主階級を亡ぼし、勞働者は之に代りて資本主が現在占むる地位に就き、以て生産と分配と一切の事項を管掌せむことを要求するのである。

此の兩見地は一見全く相反するものであつて、兩者は何れも一局面に偏し、それ自身一の完全なる理論たることが出来ぬ。されば現今の社會主義は兩者共に之を容れ、双方をして相輔けしめ、相補はしめて以て、一の完全なる理論を造るに努めなければならぬ。政治上のデモクラシーは工場に於けるデモクラシーに依りて成就せられなければならぬと同時に、國家を否認する産業上のデモクラシーは一種の産業的專制主義に陷るを避け難い。サンデカリストが生産手段の絶對的な組合有を要求するは過ぎたる要求である。生産者としての勞働者は、如何様に産業を行ふべきかは自ら之を決定すべき正當の要求を有するけれども、生産されたる物の價格を定め、消費者に向つて何を消費せよと命ずるを得べきものではない。現今個々の企業家が消費者の利益を絞り取るが如くに、勞働者の組合が之を絞り取るは、決して正當といふことが出来ぬ。<sup>4)</sup>

4) Self-Government, pp. 106-108.

#### 四 ナショナル、ギルズの主張

右の如き見地よりしてコール氏は、將來に於ける産業管理の問題は、生産者の團體たる労働者組合のみに手に委せらるべからざると同じく、消費者の利益を代表する國家の手にのみ委託せらるべきものでもなく、サンヂカリズムが扁派の主張たるが如く、コレクティヴィズムも片面的の主義たるに外ならぬとするのである。然らば氏は如何に此の問題を解決せんとするのか。之からが氏等の立場とするナショナル、ギルズの主張となつて來るのである。

即ちコール氏は將來に於ける産業管理の問題を解決せむが爲めには、消費者の利益を代表する國家と、生産者の團體たる職工組合又は其中より生れ出でたる産業的労働組合主義の團體とが業務を分擔するの組織を造るより外に道がないとするのである。而して此の産業管理の爲めに造らるゝ諸團體をナショナル、ギルズと呼ぶのであるが、そは一には之等を中世の傳習に結び付けるが爲めで、又一には之等をその傳習と區別せむが爲めなりとせられる。

コール氏は謂ふやう

吾等は、各種の産業に於ける總べての労働者が民主的に團結し、然かも總べての産業に於ける總べての労働者が一體として連結されたる組織に依りて、生産の行はるゝ社會を將來に期待する

と同時に、吾等は國家と地方團體とを民主化し、産業上の管理を生産者と消費者との間に分掌する組織を期待する。國家は生産の手段を所有せなければならぬ。キルドは生産の業務を管理せなければならぬ。斯くの如き共同作業に依りてのみ産業管理の問題は解決さるゝを得る。而して此の組織は詳細に涉つて豫め之を設計することは出来難いが、兎も角吾等は生産者側に於ける生産上の自治と責任とに對する要求を満さしめんと欲すると同時に、消費者側に於ける國家所得の公平なる分配と、其の正當に必要なとする物品と勤勞との十分なる供與を得んとする要求に應せんと欲するのである。

此の組織は國家と勞働團體との間に於ける一種の組合バートナリッシュ制であるが、それは双方對等同格なる組合でなくてはならぬ。其爲めには勞働者の團體をして、國家と對等の條件に於て掛引するを得せしむる地位に立たしめなくてはならぬと。<sup>5)</sup>

斯くてコール氏は、氏が從來の社會主義に對して之を飽足らずとする根本理由に就いて次の如く述べて居る。

現時の社會に於て人々が之を排除せむとする根本的な害惡は何であるか。之に對する解答は二つある。而して大多數の人々はそれは貧困なりといひて、奴隸的境遇なりとは答へぬ。即ち當今人々は日々多くの貧困の事實に面接するが故に、富の不公平なる分配の事實を目撃するが故に、

5) *ibid.* pp. 109ff.

貧困を除くことを以て現今時務の第一要諦と致ふるは、洵に無理からぬ所である。けれども此の解答は誤つて居る。現今多數の人々の貧困は甚しいものであらう。とはいへ貧困は病の兆候たるに過ぎぬ。奴隸的境遇こそ疾病其者である。多數者は貧困なるが故に奴隸的境遇には陥らぬけれども、奴隸的取扱を受けつゝあるが爲めに貧乏をするのである。然るにも拘らず社會主義者は、餘りに多く貧困者の物質的悲慘にのみ着眼して、それは必竟奴隸の精神的墮落に原因するものなることを認知し得ない。貧困が社會的害惡の根源なりとの考に捕はれて社會主義者は、社會の疾患は所得の分配を正うすることに依りて治癒され得るものとして、之を試んとして居る。然るに従來此點に關して何程の功績が上げられたか、富者と貧者との間に於ける溝渠は一寸も狭められな  
いではないか。寧ろ明かに益々擴がりつゝある。ギルド、ソシアリストの見解に依れば、社會問題が主として富の分配に關する問題なりとせらるゝ限りは、此の溝渠は架渡せらるゝ氣遣はないのである。現時に於ける大いなる要求は自由<sup>リベラティ</sup>に對する希求<sup>デマンド</sup>に存する。機械と資本主義とは勞働者をば奴隸<sup>サーフ</sup>たらしめた。勞働者は僅かばかりの勞賃を得る以外には、其の勞働の生産せる結果に對して何等の利害痛痒を感じぬのである。社會主義<sup>ソシヤリスム</sup>の國家は彼等により多き勞賃を支拂ふであらうけれども、それ以外に於ては勞働者は今と何等の異りなく、外部より彼等に對して置かれたる條件に服従し、其の主人の命令に従ひて働く以外、産業に關して毫も自由の權利を有せざるもので



ある。其の自由の得られざるは、依然として變る所がないであらう。

斯くて又本題に立歸つて言ふには、

コレクティヴ

社會主義者も亦労働組合を認め、之を以て將來の社會組織に於ける國家的官僚主義を牽制するのを爲すべきものとして居るけれども、産業の管理に關しては何等の權能も之に與へんとはせぬのである。然るに今やサンデカリズムの影響は、労働者團體をして益々産業管理に對する要求を強めしめつゝある。此の任務を果すが爲めには労働組合は、前に之を明かにせしが如く、大いに其の組織を擴大し勢力を充實するの必要がある。其の必要に向つては先づ現時の職工組合主義よりして大労働組合主義が生れなければならぬ。而して大労働組合主義の下に於ては、組合の間に於ける職業上の區別や産業上の區別は認められぬ。そは實に舊式の職工組合の如く、一産業毎に一組合といふ式を取るものでない。總ゆる産業を連結して労働者の一大軍を造り上げんとするのである。然し此の組織を造り上げるのみでは、まだ事業は成就されぬのであつて、其の背後に大なる建造的思想がなくてはならぬ。此の思想を十分に供與するものはギルド、ソシアリズムである。労働者は産業が社會全般の利益の爲めに労働者自らの手に依りて組織され、又經營せらるゝにあらざれば自由なることが出來ぬ。さればこそ從來の労働實質上の取引機關たる職工組合は化して一の生産團體としてのギルドとならなければならぬのである。然かもそのギルドは、中

世のギルドとは頗る異なるものであるが、兩者に共通なる性質は、それが共に労働者自身に依る産業の管理を包括すること之れである。<sup>6)</sup>

## 五 産業の管理と労働組合

コール氏は更に進むで、國家が獨占的なる諸多の大産業を國營とする場合ありとして、實際表はれ來るべき狀態を考へて見るは無益の業ならざるべしとして、次の様に述べて居る。

普通の社會主義者は國家はたゞ現在の資本的企業家の爲す所を爲し、其靴を其儘に穿つものゝ如くに考へ、労働者は今よりもよき勞賃其他の待遇をこそ得れ、やはり労働者として労働にのみ従事するものと考へて居るやうである。けれども若し然らずして國家が今少しく開けたる襟度を以て、國家は單に一般消費者の利益をのみ考ふるにあらず、組織されたる生産者としての労働者に對しては、其の勞務に關して管理權を與へ、獨立して産業を行ひ得べきギルドの成立を促進すべき態度を取りて、明日にも國內大産業の國營を實行するものとせば、それは如何にせば最も有効に之を行ひ得るであらうか。必ずや先づ第一には、労働者の團體を認め、之に對しては啻に勞働時間や賃金や、其他の條件に關する商議を爲し得べき權能を與ふるのみならず、委員會の組織に依り産業の管理上に就きて助言を爲し又共同作業を爲すの權能を賦與するであらう。二には又將

6) *ibid.* pp. 110-118.

來を洞察して、産業を議會や政府の一部局の下に置くことなく、産業はそれ自身一の獨立なる單位たるべきやう、之に關してある特殊の機關を設けるであらう。而して其の幹部職員は、當初は之を國家が任命すべきも、時機の熟するに従つて、漸次に労働者の團體中より之を選出し得べきやう爲すに吝かならぬであらう。要するに其の目的は將來産業の管理は之を國家の一官省より、團結せる生産者に引渡すに便なるやう、兼ねて又一般消費者の利益は之を衛るに足るだけの必要なる自衛法を講じて、以て之が引渡を最も容易に行ひ得べきやう其の機關を作ること存するであらう。之は洵に國家が目的とする所たるのみならず、労働組合自身の目的とする所で、ナショナル、ギルズの計畫は、生産者と消費者と双方同様に其の利益を衛らしめんとするものたるに外ならぬ。而して此の推移は先づ地方的に行はるゝであらうが、結局労働者の組合は、産業を一體として全部之を管理し得ることゝならなければならぬ。

次に産業の内部に於ける管理上の分權制は出來得る限り廣く行はれなければならぬ。而して出來得る限り多數の労働者をして責任と管理の觀念を養はしめなくてはならぬ。工場に於けるオートクラシーは消耗多くして又頹敗的である。然し乍ら雇傭されたる者が、超ゆべからざる溝渠を隔て、雇主と相對立する限りはオートクラシーは持續さるゝ運命を有つて居る。組合労働者は、雇主と共に、事業を行ふ意思は毛頭之を有して居らぬ。たゞ國家が自己の責任を感じて事を共

にせむとするに於ては、國家とならば共同に業務を行ふべき十分なる理由を有して居るのである。加之ナショナル、ギルツは國有主義を含み居るものである。而して若し勞働者の組合が總ての雇主を直接に排除奪權する迄は、又其力を總ての産業上の状態と過程との上に擴ぐる迄は、生産者としての勞働者の産業管理は之を待たなければならぬといふのならば、吾等は其魔まで待つであらう。吾等は決して今直ちに産業の管理權を得んとする者ではない。此點に關しても亦國家は精力を解放し又刺激して、勞働者をして其の能く適する所に就きて産業の管理を爲すべき十分なる手段を得せしめなくてはならぬ。國家はたゞに善き生存を供與するのみならず、之を得んとするの希望を激成せなければならぬのである。

産業國營主義の下に於ても吾等は、産業の管理に對する要求に關して勞働者が刺激を與へられんことを希望する所に異りはない。然し乍ら國營主義の實現されたる曉に於ては、國家が其の責任を自覺せずして、産業は現時のオートクラシーの代りにビュロクラシーに依りて行はるゝ恐がある。されば勞働者は國家及び一般公衆に向つて餘り多くの信任を置かざるを可とするのであつて、勞働組合の内部より湧き出づる産業管理に對する自發的要求を忘却せざることは最も必要なる所である。勞働組合に依る産業の管理は、内部より鼓吹されたと外部よりせられたるとに拘らず、勞働組合が之が任に當るに適するやう自らを造り上げたる時に於て甫めて、實現さるゝであらう。されば此の目的に向つて進み行かんが爲めには、勞働組合は主義上の大問題に關して

は、從來よりも一層強硬なる態度を執らなければならぬ。而して今や勞働組合の間に産業管理に關する其の領域を擴げんとする兆候は之を認むることが出来るが、此等の要求の眞意義が一般的に自覺せらるゝ兆候は不幸にしてまだ十分に之を認むることが出来ぬ。

最近に至るまでは『訓練』と『經營』とは雇主に依りても、勞働者に依りても、共に之れ、雇主の不可侵的な權威の認められたる範圍内に屬するものと考へられて居た。然るに近時に於けるストライキは、勞働者が既に、此等の名の陰に隠れるだけでは、『不條理』に屈服するものにあらざるを實證するに至つた。此等の範圍に於けるオートクラシーは大抵既に打破されてしまつた。而して、勞働組合が實力を得るに従て、何等の『濫用』に對しても反抗せんとする多數の聲が益々高く聞ゆるやうになつて來た。今や勞働者は如何にして管理の問題に容喙すべきかを知り得たるが爲めに、恰も一般政治に於けるが如く、非立憲的な政治を捨てゝ、立憲的な産業上の民主政治を期待し、其の曙光を認め得るまでには至つたのである。

## 六 勞働組合と國家との關係

凡べて右述ぶるが如くにして、將來勞働組合は産業管理の任に當るべきものとせられ、然かも勞働組合の團體は、國家と共同して事務の處理に當るべきものとせられるのであるから、國家と勞働組合との關係は今後益々密接となり互に十分なる了解を得なければならぬ筈である。此の國家

と勞働組合との現今及び將來に於ける關係に就いては、コール氏は大要次のやうな見解を披瀝して居る。

將來に於ては産業の管理に關する以上の計畫が採用せらるべきものとするも、現時に在りては尙ほ國家が勞働組合に對する態度及び勞働組合が國家に對する態度よりして、兩者間の關係に就き種々の困難なる問題の起るを避け難いであらう。現今國家は謂はゞオポーチニズムに據れるものであつて、將來に對して十分なる洞見と、之に對する確乎たる態度を以て進み行くものとは、見ることが出來ぬ。而して勞働組合が國家に對する態度は、從來兎角反抗的で、國家は資本主の牙城たるに過ぎざれば、之と妥協し之と事を共にするは、敵に欺を通じ敵と事を共にするに外ならぬとは、組合多數者の考へて來た信條である。而して若し國家が勞働組合に對する態度が組合の獨立を脅かし又は之を傷くるものであるならば、組合は命を賭しても、之と抗爭せなければならぬのは言ふ迄もない。けれども現今の實狀に於ては、國家は益々深く産業上の事に干涉せなければならぬやうになつて來て居るのだから、勞働組合も亦今後は益々多く國家と事を共にせなければならぬやうになつて來るであらう。之は洵に避け難い時勢の要求である。勞働組合が之を好むにせよ好まざるにせよ、事實上どうしても政府の要求に應じて、之と事を共にせなければならぬであらう。即ち勞働組合は早晚國家と事を共にするか、それとも絶対に之と絶縁して敵對するかを決めなければならぬ羽目に陥るを避け難いであらう。而して其時勞働組合は已に資本主の階

級を敵とし之と戦ふを以て手一杯とするに、尙ほ其上に強大なる敵手を國家に見出すは、如何なものであらうか。粗雑な言方ながら國家は一般消費者を代表するものである。而して労働者は國家より得べき多くのものを有つて居る。労働組合は獨立をこそ思ふべけれ、之が爲めに孤立に陥つてはならぬ。労働者は資本主に對立し之に反抗すべき實力を養ふに適する多くのものを國家より獲べき筈である。

されば労働組合は來つて國家と共力すると同時に、益々自己の力を養ひて其の獨立を確め、國家に對して之と對等の條件の下に共同事業に入るの準備をせなければならぬ。生産事業の國營といふことは、多くの意義を含蓄するけれど、必竟一の手段たるに過ぎぬ。それ自身が目的たる譯ではないから、其の狀態の下に於ける産業の管理に關しては、國有制と共に新組織が造られなければならぬのである。

斯るが故に労働組合の將來は、社會の狀態が變化するに連れて、一の闘争團體たる現狀より漸次進みて、一の生産團體たる組織を整へ、社會全般の組織中に於て、自己の占むべき地位を確立する任務に近づかんとする精神に依頼するものである。社會の階級的組織は、階級闘争を必要とする。然し乍ら階級闘争なるものはたゞ一の局面たるに過ぎぬ。果して然りとせば、もはや其所に私的な雇主階級が存在せざるに至り、戦ふべき相手の無くなつた曉には、組合は何を以て其の目的と爲すべきであるか。其曉には又新たなる相手を見出して、之に戦を挑むべきであるか。即

ち國家を以て新たな敵手として、之に對して戰端を開くを以て任務と爲すべきであるか、勞働組合は果して之を欲するか。欲するとならばそれもよからうが、然し國家は資本主階級よりは、一段と強い敵たることを忘れてはならぬ。

何れにしても産業戰爭を以て永久的のものと見るは社會に關する理論としては、憐むべき虚弱な議論たるを免れぬ。かゝる戰は正義を得んが爲めにせらるゝものであるから、正義の得られたる際には戰も終らなければならぬ。勞働組合はかゝる時期に達すれば、たゞ單に戰鬪を之れ事とする以上に、今少しく重大なる任務を持たなくてはならぬ。而して其の任務は社會的軋轢より出で來らず、社會的渾和より出で來らなければならぬ。大勞働組合主義はたゞに階級戰爭の爲めに勞働者を集むるに止らず、進むで、各の勞働者をば、革命を醸成せむが爲めならず、富を生産せむが爲めに存在する、産業軍に加入せしめんとするものである。勞働組合は伴れる社會的平和と賸物の愛國主義とに對しては、大いに戰はなければならぬが、又資本主義制に對しては極力闘争して之を廢除せなければならぬが、國家とは共に手を携へて共に努力して、社會生存上の任務を果すに心懸けねばならぬ。

コール氏は右の如くに述べて、大勞働組合主義と其の將來としてのナショナル、ギルズの建立とを以て、圓滑なる社會生活の理想を實現すべき唯一の道なりと主張するのである。勞働組合をして闘争團體より化して生産團體たらしめんとするは即ち其の主張の眼目である。(終)